

【追加資料】二〇一九年十一月三十日 西川 哲矢（史料番号は、西川哲矢編著『交野市史研究紀要26輯 河内国交野郡倉治村文書』、交野市教育委員会、2019年）に基づく）

①源氏の瀧新池と桜の植樹

天保十二（一八四一）「この年、倉治領主久貝正典は源氏滝付近の景勝地を愛し、滝の口付近（旧交野中学敷地）にその茶亭を設け、滝の口に新池を造り、桜100本の植樹をする。」（加地嘉三家記録）『交野市史 復刻編』694〜695頁とあるが、原史料見いだせず。

【関連資料】

37. 源氏の瀧新池人足積人数・寄石灯籠積書、長尾役所へ届出

瀧口新池人足積り上并寄石燈籠積り上

一堤長サ十二間 一南北長 四間

堤敷 四間 堤敷 貳間半

点六尺五寸 点 六尺五寸

高平均七尺 高 五尺五寸

外ニ瀧新川取膳イ共

右人足入高 二百八十四人

火袋代

一寄石燈籠 銀九十五匁 石工五平助渡し

同八十壺匁九分 右石工十九人半代

同人渡し

〆百七十六匁九分

右之通御座候、以上

天保十二丑年八月

庄や  
年寄

長尾

御役所

38. 源氏の瀧へ桜植付・石垣手入・新道普請につき、代銀・人足等積もり書、長尾役所へ届出

乍恐口上

一桜百本代三百目 摂州池田在小池村忠兵衛渡し

一百九十九匁 瀧■并（萬カ）

九分五厘 御亭廻り石垣手入口十六人半

但し飯代共老入二四匁三分ツ、

一人足三百八十五人 桜植之場所拵并不動前新道開人足惣入用〆

右之通御座候間、乍恐此段奉申上候、以上

下ケ紙 右人足入高御尋ニ付奉申上候へ共、当瀧御引立ニ付、

百姓一同難有奉存候ニ付、人足賃之儀ハ不申御請候

尤農業作間ヲ見合仕候へハ、差而農方差支等ニ相成

不申、此段訳而奉申上候、以上

天保十二丑年十二月廿五日

庄や

年寄

長尾

付、徳二郎けか仕候ヲ達御間、石燈籠引之節始末

右同日書付ヲ以奉申上置候

ノ

### 源氏滝碑銘

わかしめゆへるくら治むらなる滝はしろきはたてのなひくに似たりとはやくより源氏のたきと  
いいならわしたりとなむ。雲いる山の岩かねよりみなきりおつるさまはなに山姫のぬのさらすらむ  
となかめけるもかかる所にやありけむ。かくてとし月をわたりなは、そのかみ交野のみに雪と散  
りけむ花さへに、むかしの春に立ちかへり、いかはかりうれしとおもふらむ。われはからすも、こ  
たひこのちかきわたりなる遠つおやのみはかにまいりけるに、典安・広繁らのこの滝をもみせんと  
て、かねて人々とはかりて、なにくれと心をつくしたるよしなれは行てみるに、けにいひしらぬな  
かめなり。

あめつちとともにうこかぬ岩かねに万代かかれ滝のしら糸

天保といふとしの十あまり五とせのはる

因幡守藤原朝臣正典しるす

### 【現代語訳】

私(久貝正典)が領有する倉治村にある滝は、(源氏の旗である)白旗が靡くの似ているというので、昔から「源氏の滝」と言いならわしているのだという。雲のかかる山の大きな岩から(水が)あふれおちる様は、「なに山姫の布さらすらむ」と(その昔伊勢が)和歌を詠んだ(竜門寺のような)ところもこのようなところにあったのだろう(と思う)。

このように(思案をめぐらせながら)年月を過ごしたならば、その昔交野の御野に雪のように散った花(の景色)までも(想像され)、昔の春に戻ってきたような気分になり、どれほどうれしいことだろう。

私は思いかけず、このたびこの近いところにある遠いご先祖様のお墓(正俊寺)に参ったが、(家臣である)典安・広繁たちがこの滝を見せたいと思って、以前から人々と計画して、いろいろと心

をつくして(用意してくれた)ので、行ってみたところ、なんとも言葉で言い表せない(ほど素晴らしい)眺めである。

天地とともに動かぬ岩々根に万代かかれ滝の白糸

(天地とともに動かずどっしりとそこにある大岩に、白糸のような滝の水が永遠にかかっていることを願う)

天保一五年の春

### 【解説】

天保15(甲辰、1844)年春、二条在番を終えた久貝正典は、長尾陣屋に立ち寄り、代官である荘与一郎典安と嶋田保太夫広繁の案内で源氏の瀧を訪れる。その際、正典は倉治村庄屋加地友三郎に感懐を記して送り、友三郎はこれを大理石に刻んで瀧のかたわらに建てた。これが現在も残る石碑である。碑銘からは様々な表現を用いて書かれていることがわかる。たとえば「わかしめゆえる」「雲いる」という歌語を用いるほか、「なに山姫のぬのさらすらむ」という表現には、平安時代の歌人“伊勢”の「裁ち縫はぬ 衣着し人も なきものを なに山姫の 布さらすらむ」(意訳…無縫の衣を着る人、すなわち仙人もいないのに、どうして山姫が布をさらしているのだろうか)が踏まえられている。源氏の瀧を、仙人が住むと言われた竜門寺の滝の幻想的な風景に重ねている。さらに、「交野のみに雪とちりけむ花」との表現は、藤原俊成の歌「またや見む 交野の御野の 桜狩り花の雪散る 春のあけぼの」(意訳…「再び見ることはできないほど素晴らしい。 “交野の御野”で行う桜狩りの中、雪のように桜の花が散る春の明け方である。」)を踏まえたものと考えられる。

※和歌の解釈については田中融氏の教示を得た。